The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈翻訳〉「レギーネは本当のところどう考えていたのか?」
Author(s)	久保田, 勝己; Jensen, Henrik Fibæk
Citation	IDUN ー北欧研究ー. 2025, 25, p. 185-199
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100760
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

［翻訳］

「レギーネは本当のところどう考えていたのか?」[1]

Henrik Fibæk Jensen 著・久保田 勝己 訳

2001 年の 9 月，文学のアヒル池（andedam 小さな世界 訳注）で水素爆弾とも見紛う巨大な爆弾が炸裂した．**Erik Søndergaard Hansen** なる者が ***Regine Olsens dagbog*** を出版したのだ. 紛れもなく彼が先祖から相続したものだという．彼の祖父が 1896 年に，レギーネの夫シュレーゲル(Friedrich Schlegel 1817-96 訳注）の遺した蔵書のオークションでクリスチャン 2 世に関する 2 冊本を買った．詳しく調べて明らかになったのだが, 2 冊目の一番うしろにレギーネが 32 頁からなる日記を隠していた．実際，彼女がそれまで知られておらず，このとき日の目を見たという日記を書いていたとは信じがたいことだった.「偽物か本物か?」ある新聞にはそんな見出しが踊った．そこでは人々が緊張して専門家の判定を待ち構えていた.「本当の破裂弾かそれとも屋内花火かはいずれ明らかになるだろう」と．残念ながらそこまでで，その後評論家たちはこの本の創作者は誰なのかという議論へと飛びついて行った．Bo Kampmann Walther は作家 **Svend Åge Madsen** を名指し，Niels Jørgen Cappelørn は大学教授の **Johannes Sløk** を，John Chr. Jørgensen は ”オーフースの変り者” 作家 **Flemming Chr. Nielsen** をそれぞれ名指した．最後に挙った名前が正解だった.

作家 **Flemming Chr. Nielsen**（1943 生）は **Regine Olsens dagbog** ばかりかこの日記に Søndergaard Hansen の手になる序文まで書いていた. レギーネは, 1840 年の 1 月 23 日 18 歳の誕生日に日記帳を贈られ，1841 年の年末で書くのを止めているが，記述は彼女がキェルケゴールに最も近かったこの期間をカバーしている．当初は，彼はただ彼女の人生の周辺における興味津々の「才能豊かな」人物に過ぎず，1840 年の 7 月でも彼女には彼の名前さえ不確かで，Kjerkegaard や Kjierkegaard や Kierkegaard といろんな名前をかわるがわる使っており，この 7 月の 19 日から正確な名前を綴るようになった．まさにこの日，彼女の兄の Jonas が ”恋人が私を置いてきぼりにした” と言って彼女のことをからかった（彼キェルケゴールは先祖の地，西ユランの Sædding への巡礼の旅に出ていたのだ)．今

---

[1] *Kierkegaards saltomortalespring*（『キェルケゴールの宙返り』）の一章 “Hvad tænkte egentlig Regine?”．レギーネ（Regine Olsen1822-1904）はキェルケゴール（Søren Kierkegaard 1813-55）が婚約破棄した恋人．なお，以下の脚注はすべて著者 Jensen による原注であるが，筆者が「　」で訳した箇所などに付されていた例えば “*Nielsen*（2001）s.26 ” のような四人の作家の著書からの引用箇所を示す原注 60 件（＝60 行）の記載を省略した.

や彼は彼女の親しい仲間の中に入った．彼が彼女に求婚し，1840 年の 9 月に承諾を得ると，彼は ”セーアン” として日記に登場した．

キェルケゴールは，よく気のつく根気強いレギーネの崇拝者だった．彼女に恋して林檎の木に Regine のイニシャルを刻みつけたり，雨あられと手紙やプレゼントを贈った．書物，アクセサリー，瓶入り香水，赤い絹のスカーフ，燭台，針箱，イーゼル等々．「なんとも多すぎるプレゼント」彼女は息苦しい口調で書き留めた．ところが早くも問題が起こった．彼女には，恋人の大袈裟すぎる仰山な手紙が理解し難かったのだ．彼は，際限のない ”常に難解な哲学” で語り，書き，考えたが，一方のレギーネは純粋に女性として親密さ，抱擁，手を繋いでの散策，ロマンティックなダンスに憧れた．彼女は，彼が自らの重愁（tungsind）にほとんど押しつぶされそうになった時も優しく接していたが，同時に大きな困難も感じていた．「自分が赤ん坊を抱いた彼の妻になるという想像をすることに」，「レギーネ・キェルケゴールとなって私は幸せな妻になれるのだろうか，と」．

「自分たちの関係は何かおかしいのではないか」レギーネにそんな思いが次第にはっきりしてきた頃，彼女は 1840 年の 11 月極めて特別な贈物を受け取った．「セーアンが『古い思い出』（*Gamle Minder*　Carl Bernhard 作 1840.11.16 発売 訳注）という小説の第一部を送ってきた．その小説は『僕がまだ若かったとき，―ああ，僕はもう若くはない』という言葉で始まっていた．セーアンは今 27 歳半だ」．その 2 日後，第二部が届いた．この本の贈物に対してレギーネは極めて意味深長な反応をした．彼女は，第一部を受け取った翌日には既に「セーアンに情熱的な（erotisk）長い手紙」を送っていた．彼女は，彼が『古い思い出』を送ってきた理由に気づいていた．彼の眼差しは後方に向いており，二人の恋は既に終わったものと考えて，悲しくめめしい憧憬を心に抱いていたのだが，彼女の眼差しは前方に向かっており，完全な結婚生活そしてそれが意味するすべてのことを願っていたのだ．（この何か月かのちに彼女がキェルケゴールを訪ね，彼がジャムを塗ったホットケーキでもてなしたとき，彼女は恋愛についての率直な考え，それが憧れとは別物であることを彼に言ったものだ）．レギーネがキェルケゴールとの関係が岐路に近づいていることを認識していたことは，彼女が Bernhard の小説を読むときに使っていた栞が証明している．何週間か前に，キェルケゴールが彼女に送ったのが「木造のパビリオンの中で凍えている人をインクで描いたスケッチ．彼を捕まえようと急いでいるこの人物が私．だが，彼は捕まらない」という印象深いスケッチ，キェルケゴールをその恐るべき重愁から解放しようとする彼女の試みは断るということを婚約者に分からせようとしたこのスケッチを，レギーネは『古い思い出』を読むときの栞としてお守りのようにこれ見よがしに使っていたのだ．

甚だしく現実離れしながら同時に痛快極まりない探偵小説 ***Rejsen til Regine*** (2003) において **Flemming Chr. Nielsen** は残されたレギーネの日記に込められた意図について空想を膨らませた．1900 年代の初期， Christian Ejbye Hansen の母方の祖父が未亡人 Regine Schlegel の遺産オークションで『エッダ論およびその起源』を購入し，この掘り出し物を詳しく調べたときに，レギーネがエッダ本に隠したまま，その後すっかり忘れていた彼女の日記を見つけたのだ．Ejbye は，2000 年のはじめにこれを出版し，皆が深く考えずに偽物だと推測したとき，コペンハーゲンの筆頭オークションハウスを通じて売りに出してその真正を証明しようとした．だが，事はすんなりとは行かなかった．その間彼は度重なる紛糾（押し入り，襲撃，その他諸々）に巻き込まれたため，この悪名高い日記をアラビアの砂漠に埋める顛末となった．のちに彼がそれを掘り起こしたとき，砂漠の獣がそれを完全にバラバラに食いちぎっていた．残っていたのは ”Graadig (貪欲な)” という単語の記された紙切れ一つだけだった．1841 年 10 月 19 日の日付のあるメモ，即ち，「セーアンは新しいズボンを穿いていた，そして私はまた彼の嗚咽 (hans Graad igjen)を聞かなければならなかった．神の愛が私たちの結婚を祝福してくださいますように」の中の 1 語ちょっとの言葉が残っていたのだった．

Ejbye は，レギーネ・オルセンの日記がただの 1 語に縮小されているのを面白いと思った．それは面白いだけでなく，”Graadig”(”Graad igjen”) という単語が砂漠の獣との遭遇を生き延びたことには正当でシンボリックな意味がある．というのも，この物語は全体として経済的にも最も高価なレギーネの日記，王室の宝石類やかの聖杯にも比肩され，「唯一無二の事件」「世界的センセーション」と書きたてられる日記を手に入れたいという癒し難くすべてを呑み尽くすごとき欲望が文学の詐欺師のみならず王立図書館の学識ある研究者までを犯罪，いや殺人にまでも駆り立てた次第を扱っているからだ．

Rejsen til Regine によると，レギーネは日記を 1838 年に始めて，1847 年の結婚の前で終えていた．「乙女らしい少し鋭くそして貞節な筆使い」で彼女は自身が経験したこと，友達のこと，そして若い女の子としての喜びや夢を綴り，花や可愛い子猫をスケッチしていた．日記帳の表紙と裏表紙に銀のハートが描かれているのも故なしとはしないだろう．それは心の内の感情を綴るまさに心のノートだったのだ．

この探偵小説版においても，キェルケゴールをふったのはレギーネだった．「私はもう彼に会いたくない」, 日記からはそんな声が聞こえてくる. それはこう続く．「彼には元気を取り戻して，私に対して男らしくなってほしかった．そうすれば私たちは家族になれた．だがそうはならなかった，彼が男らしくなかったから」．最後の瞬間に彼女に手を切らせたのは，エロスの花を咲かせ「男」となる能力／

意欲が彼に欠けていたからだ.

Regine Olsens dagbog とそれに続く *Rejsen til Regine en krimi om Søren Kierkegaards love story* という著書において Flemming Chr. Nielsen は出来る限り若きレギーネの心の内を洞察するとともに，キェルケゴールをふったのがレギーネでありその逆ではなかったという命題を証明しようとしたのである.

デンマークの神学者，作家にして社会問題の論客 **Sørine Gotfredsen**（1967 生）は 2005 年に，のちの彼女の言によると，彼女自身キェルケゴールと婚約したいと望んでいたから書いたのだという小説 ***Regine*** を出版した[2]. 時間的にはレギーネとキェルケゴールが出会った 1837 年の 5 月から最後の出会い 1855 年の 3 月までの 18 年をカバーしている．作品の主要部分はレギーネの視点で書かれるが，それに加えて彼女の日記（架空の）からの一連の抜粋及び全体として再現されたキェルケゴールのすべての手紙（真正の）が含まれる．Gotfredsen の小説のキーワードは「運命」（“bestemmelse”）である．それは二人の主人公たちが共々愛した遠大な一貫性を持つ唯一の言葉なのだ.

キェルケゴールは語っていた.「私は自分の大方の人生を通じて，一人ひとりの子供には滅多なことでは，おそらくただの一度でさえ，振り払うことの出来ない一種の運命が賦与されていると信じてきた」．彼が理念の世界で閉鎖的な人生を送ることに抗いがたい欲求を感じている一方で，同時に普通の人間的な現実世界の中での複合的な人生を夢見ていたという状況は，彼が中間地帯というかどっちつかずの状態で生きるということを招来した．そこでは彼は「まどろみの中にいるごとく【・・・】常に大きな雷鳴が轟く瞬間を待つことになる」．現実生活の重荷はキェルケゴールを脅迫的に且つ致命的と言えるほどに襲ったが，それは大きな魅力的なものをも含んでいて，それこそ彼がレギーネと婚約した背景だった．彼は望んでいたのだ，彼女が彼の心の分裂を取り除く，比喩的に言えば大きな雷鳴として機能してくれることを，そしてある意味彼を現実生活の出来る人間にしてくれることを，それには人々の間に広く行き渡っている関係，例えば夕飯やそれに類するすべてのことが含まれるのだ.

レギーネは，運命観を自分の人生を測定するしるしとして用いてもいた．キェルケゴールに出会うまでの彼女はジャンヌダルクに夢中で，出会ってからは彼がはっきり彼女の使命，ミッションとなった.「私が彼に幸せを教えてあげる」彼女は日記にそう書いており，この教師としての役割は神から自分に割り当てられたものと考えていた．幸せへの道のりは容易ではないが行けるものであり，必然的に結婚を経ることになる.「本質的なのは，セーアンと私が幸せになること，彼と

[2] テレビ番組 ”Kierkegaard-samtaler i Rundetårn” (2013)．インタビュアーKlaus Rothstein が Sørine と Søren は名前からしてお似合いだと明かして機知に富んだ解説をした.

私が一緒に彼の重愁を克服すること.【・・・】これが私の一生を捧げる仕事なのだ.【・・・】彼女は彼を家族生活の中へと導き，彼にどこまでもつきまとっている果て知れない不安を和らげることが出来るかもしれないし，時が経てば彼の重愁や傷つき易さも彼から手を離すだろう」. 彼女は，キェルケゴールの未来の花嫁に選ばれたのが彼女であり「ほかの誰でもなかった」ことを心底から喜んでいた.「これこそが彼女の運命だった，そしてレギーネはこの運命という言葉を愛したのだった」.

13 か月の婚約は二人の人間，二つの運命の物語，はじめは調和のとれた協和音の中で一つになれると思われながら，のちには双方の人生を変えてしまうほどの激しい衝突に至るという物語である．Gotfredsen は，レギーネがキェルケゴールを Nørregade の家に初めて訪ねたときのぎくしゃくを極めて具体的に明かしている.「時間をかけて慣れ親しんだ婚約者同士」のように，二人は居間で会話を交わし，見事なカップでコーヒーを飲んだ．一見したところ完璧な婚前の市民的田園詩．だが違っていた．こっそりとレギーネはキェルケゴールの書き物机の，人を脅すような佇まいをチラ見していた.「一度ならずレギーネは考えた．もしかしたらセーアン，本当は机の前に坐りたがっているのではないだろうか，だが彼女はそれを口にせず，別のことを考えた．セーアンが書き物と妻とのつき合いの両方を出来るようになるのにそう長くはかからないだろう，と」[3].

レギーネが『古い思い出』を受け取ったのは，二人の運命がまだ目立った軋轢となる前のこうしたまだいわば浅瀬の状態においてだった．1840 年の 11 月 18 日彼女は日記でキェルケゴールからいつもの水曜日の手紙が貰えなかったことに不平を漏らし，こう続けていた.「手紙の代わりに彼は今日，父がたびたび口にしていた Carl Bernhard という作家の新しい小説を送ってきた．それは『古い思い出』という本で，美しく装丁されていたが，私はそのタイトルが好きになれなかった．私は，最初の数行を読んだのだが，物語は若き日を恋う一人の男の話だ．私は，セーアンからの贈り物なのだから最後まで読もうと思うが，どんどん面白くなるとは思えない．もしセーアンが突然訪ねてきたら，私は自分の思うところをしっかり伝えようと思う. 多分私は思うところを暴走させることになるだろうが，セーアンはこの贈物をするにつけて何か隠された伝言を私にしているのかもしれない，この本に何か伝言などあるのだろうか？」. 違う，彼女の思いは暴走などしなかった，婚約者が送ってきた贈物には「隠された伝言」があった，伝言とはとりわけ『古い思い出』に関わるものだった，そう，それこそこの著作における核

[3] キェルケゴールが著作家にも夫／父親／扶養者にもなれるはずというレギーネの夢は的外れなことではなかった．Adam Oehlenschläger それに N.F.S. Grundtvig，二人の同時代の精神の巨人は例えば量的にも質的にも大きな著作活動を築き上げたが同時に普通の世事をも成し遂げた.

心問題なのだ．彼女は直ちにこの小説が「どんどん面白く」なると思ったわけではない，1841 年の 1 月の末にはクリスチャンボー城での大きな仮装舞踏会のことを描いたはじめの数章に到達したばかりだった．『古い思い出』は，”魅惑のロマン”（*pageturner*）などではなかった，レギーネは，まずはクリスマス，そしてそのあとの 19 歳の誕生日（1 月 23 日 訳注）の準備に忙殺されていたのだった．

レギーネが Bernhard の小説のタイトルを嫌ったについては意味深長なものがある．彼女は本能的に感じたのだ，キェルケゴールは二人の婚約を終わったものと考え，彼女と一緒に居ることよりも好きな机の傍で余生を過ごすことを望んでいるのだ，と．しかし，もし悲しくも過去を向いた思い出（古い思い出）が明るく未来を向いた希望に勝ってしまったら，彼女が自らの生を築いた基盤は無惨に壊れてしまうだろう．そうすればキェルケゴールを幸せにするという彼女の運命はどうなるのか？1841 年 10 月の最終的な破約は，彼女の「あれもこれも」が実現不可能な幻想（fatamorganaprojekt 蜃気楼）であり，彼の「あれかこれか」が否定しがたい現実であることを彼女に思い知らせた．理念と現実は，キェルケゴールのように特殊な生い立ちと運命を持った人間にあっては簡単には一致しないのだ．

Gotfredsen のレギーネはしかしながら，突進する天才のための触媒（katalysator）に甘んじるようなタイプではなかった．逆に彼女は，私たちには私たち自身の個々の運命があり，したがって一個の人間が単に他の人間のための道具として働くことはあり得ないことだと見抜いていた．彼女がキェルケゴールを読むことでこうした認識を手に入れたことは素晴らしいところだ．彼は，『二つの建徳的講話』（*To opbyggelige Taler* 1843）と共に彼女を解き放つ．「今や特別の使命に関する自前の考えは去り，変わらぬ願望の重荷はそれと共に消え失せた．これぞ解放だった」キェルケゴールとの婚約は，結婚には至らなかったけれど，双方にとって決定的な意味をもたらした．「私たちは神からお互いを授けられたのだ，この世で夫婦として生きるためではなく，何か全く別のことを行なうために」．

アメリカ人法学者 **Caroline Coleman O'Neill**（1964 生）が，デビュー作 ***Loving Søren***（2005）において西インド諸島のレギーネを見届けたのは，時間的には Gotfredsen の小説（の結末）から僅か 1 年も経たない時のことだった．ストーリーは 1856 年 1 月 4 日の焼けつくような熱帯の太陽の下で閉じられるのである．この本を手に取ると，一種逆説的な献辞に驚かされる．「父上には，私たちをセーアン・キェルケゴールへと導いてくださったことに感謝します．母上には，そうでなかったことに」．その説明は次のように続く．O'Neill の父親は 40 代はじめの頃，キェルケゴールの影響の下クリスチャンへと生まれかわった．彼は間断なく四人の子供たちと神学的，哲学的な問題について議論しようとしたが，Caroline

はキェルケゴールの偏執的な苦悩の掘り下げに強い嫌悪感を持っていたので，思春期，学生時代を通じて一貫して彼の著作を読むことを拒んでいた．だが，32 歳になったとき，父親から『おそれとおののき』の一冊を贈られた．それにはレギーネとの婚約に関わる示唆的な前書きが含まれていた．「私は，とりこになってしまった，そのラブストーリーが私を動かしたからではない，そのラブストーリーがどのようにしてキェルケゴールの哲学への入口となったかを知ったからだった」．そこからの 7 年間を O'Neill は大半のキェルケゴールの著作，いくつかのキェルケゴールに関する文献，多くのデンマーク黄金時代の文化・芸術史的な作品を読むことに費やした．コペンハーゲンとデンマーク領西インド諸島それぞれへの 2 回の研究旅行がこれに加わった．こうした研鑽の結果がこの本になった[4]．

O'Neill は *Loving Søren* で一人称形式を使わないが，レギーネに一貫した視点を置いている．我々が世界を見て理解するのも彼女を介してのことになる．作品は過去形で書かれているが，イタリック体で表現されている彼女の内奥，決して語られることのない思いに我々が直面すると共に洞察するのは，出来事に対するその時々の彼女の反応だ．

レギーネは二人の男に挟まれて心を乱す若い娘だった．一人はシュレーゲル，レギーネからもその父親からも「普通の人」と思われていた．もう一人がキェルケゴールで誰からも「特異な人」と見られていた．直ちに言えることは，普通であることに何らおかしなところなどないということだ．

「フリッツ(Friedrich)・シュレーゲルは，ほんとに素敵な若者」，レギーネの母親はそう言っていた. 彼は思いやりがあり, 思慮深く, 信頼出来て, 理性的, 等々. レギーネは，彼と一緒になって安心して先の見通せる人生が送れることに一点の疑いも持たなかった．しかし，ちょっと退屈かな，とも．「彼女は想像した，自分とフリッツが燃え盛る暖炉の前に並んで座っているところを．二人とも髪の毛はグレーだ．彼女の髪はきちんと束ねられている．彼女はロッキングチェアーで編み物をしており，フリッツの方は色褪せた薔薇柄の更紗（chintz）張りの古ぼけた肘掛け椅子に凭れて新聞を読んでいる．二人には会話が無かった」．このような

[4] O'Neill は 2005 年に行なわれたインタビューで，自分の経歴について話した(internetsitet brothersjudd.com 参照)．彼女の本は好感をもって受け入れられた．「*Loving Søren* を手に入れ，お茶を手に暖炉の傍に坐って，魂がさらわれる準備をしたまえ」と Thom Lemmons は書いた．Oprah Winfrey は自分の TV 番組でこの本に無条件の推薦を出し，そのため映画監督の Steven Spielberg は O'Neill の神学哲学的で歴史的なロマン小説に興味を持った．それは Elina Löwensohn のレギーネ，Russell Crowe か George Clooney のキェルケゴールというキャストで映画化したいと思うほどに彼を魅了した．第一に，彼が既に特異な天才を描く才能を証明していたからであるし，第二に彼が自身優れた思想家であったことは言うまでもないが「この偉大なデンマーク人との身体的共通点を有していたからだ．こののち，この不思議な映画企画のことは聞こえてこなかった．

未来の情景を想像すると，彼女は文字通り呼吸困難のパニックに陥るのだった．「彼女にフリッツとの結婚は考えられなかった．こうした炉辺の平和は，彼女の中の小さな部分に訴えてくるだけだった．彼女の若くて活気に満ちた部分は更なるものを求めていた」．これに対してキェルケゴールは，もっと生き生きとした予測出来ないところのある人生に対する彼女生来の憧れを満たしてくれそうだった．どうすれば彼を捕まえられるか誰にも全く分からなかった[5]．彼はしばしば，興味のあるふりをして議論を挑発するためだけに過激な見解で周囲に挑戦することを好んだ．身体的には彼は極めて魅力的だった．顔には神経質な激しさと芸術家らしい繊細な美しさがあったし，身体からは内に燃える情熱が迸っていた．彼は，彼女に美しく生き生きとしていると感じさせたし，すべてのことにより深い意味を与えること，「日々の暮らしの陳腐さを善が悪に勝利する寓話に変えること」が出来た．そう，シュレーゲルとキェルケゴールは二つの異なる人生受容を代表していたのだ[6]．そして，レギーネはある時点までは一番目の人(シュレーゲル)と親しくなったけれど，次第にますます強く二番目の人(キェルケゴール)に惹かれて行くのを感じた．ある時点では彼女は明らかにシュレーゲルがキェルケゴールより先に求婚してくるのではないかと恐れていた．そうはならなかった．セーアンは，きっぱりと同意し，二人は婚約者同士として互いに親しくつき合うことになった．

レギーネは，別の人生も夢見たが，何度も思い出したのは大きな世界と出会ってわが家の炉辺が恋しくなる H.C. Andersen のおとぎ話「女羊飼いと煙突掃除人」に出てくる女羊飼いのことだった．キェルケゴール夫人という人生に対する彼女の考えは型どおりのもので，あのシュレーゲル空想と大きな違いはなかった．「目の前に一つのイメージが浮かんだ．アヒルがガーガー鳴き，ガチョウが羽搏きする田舎の小さな教会の，入り口に立っている黒いフロックコートのセーアン・キェ

---

[5] 興味深いのは，O'Neill 本のキェルケゴールがはじめはシュレーゲルと友好関係を築いたのに，のちには彼を Olsen 家に入り込むための手形としてシニカルに利用したことだ．このようにして彼女（O'Neill）はキェルケゴールを「一般的に」我々が知っているよりもはるかに計算高く，はるかに手練手管に長けた男にした．この魅力ある三角関係は，誘惑者ヨハンネが第三の男をコーデリアに接近させる『あれかこれか』から思いついたと見て間違いない．

[6] 二人の相異は芸術に対する趣味にも認められる．シュレーゲルは黄金時代満開の古典的な家族肖像画を好んだ，それが彼の思う良き生活を反映していたからだ．四つの壁に囲まれた家庭の安全で良い居心地．一方のキェルケゴールは Eckerberg の神秘的で謎めいた絵画 Langebro i Maaneskin med løbende Figurer(1836)に魅了されていた．それは噂によれば，Carl Bernhard の小説 "Dagvognen" にインスピレーションを得て描かれたもので，そこでは男性の主人公が Langebro に近い港の貯水池で溺れていた女性を救うことになっている．現代では，Bjarne Reuter がこの絵を精神病質者の連続殺人を扱ったスリラー小説 Langebro med løbende Figurer(1995)で使った．Jørgen Bonde Jensen は，Forgyldning forgår の中でこの絵の詳しい解釈を提示している．— Guldalderlæsninger (1998　s. 23-60)

ルケゴールと彼の横に立って教区民たちに慎み深く頷いている彼女自身の．彼女は田舎の牧師の完璧な妻になるだろう．完璧だ．彼女は集会の女性たちに敬虔で懸命なアドバイスをすることが出来るだろう．説教の原稿を書いているセーアンに温かいお茶を運ぶことも出来るだろう．その原稿に彼女なりの見解を加えることさえ出来るだろう」．このような将来への期待を持ちながらも，彼女はキェルケゴールの偏執的な苦悩の掘り下げに撥ねつけられるのを感じた．「聖書は神に愛された者は常に不幸であると教えている」と彼は言い，これに対して彼女はこう答えた「神は愛です【・・・】神は私たちを苦しみのままに置き去りにはされません」と．キェルケゴールは頑固に自分の意見に固執した．「神を愛すること，この世で幸せになること，それは不可能なことなのだ」．彼は常に酷い重愁と身を苛む罪意識に苦しんだ．レギーネは神がすべてを許してくださることを彼に納得させることが出来なかった．彼女の婚約者が唯一平安を見出せる場所は彼の書き物机の傍だった．「書くことで私は大いに助けられている．書いているとき，私は気分が良い．そんなときは人生の不愉快なことを皆忘れる」．これにレギーネはこう答えた．「『書くことが本当の生活とは言えません』．私は．」ようやく彼女は覚った，ガーガー鳴くアヒルや善き教区民に囲まれた牧師館という夢が実現不可能なことを．彼女とセーアンは人生に全く違った期待を持っていたので，二人の道が分かれてしまうのは必至のことだった．しばらくののち彼女は再びシュレーゲルと親しむようになった．

O'Neill は，時間を 1842 年から 1855 年へと跳ばし，本の最終 9 章では我々は 1856 年 1 月の Sankt Croix（シュレーゲルの任地，西インド諸島 訳注）に居ることとなる．レギーネは，1854 年の 9 月に死産をしたのち健康を取り戻していた．彼女は，なおもキェルケゴールに強く惹かれていたが，シュレーゲルのためにも彼を忘れなければと神に祈った．キェルケゴールの遺産のあれこれが入ったルン（Henrik Lund 1825-89 キェルケゴールの甥 訳注）からの小包を受け取ったとき，彼女の願いは果たされた．手紙や覚え書等々に現われる自身の過去に対面して，彼女はようやく理解した．こよなく愛していたセーアンが彼女に不届きな扱いをしていたことを，彼がごく幼い少女の感情を実に許しがたいやり方で弄んでいたことを．「一つのイメージが頭に浮かんだ，薄暗い出入り口で待ち伏せしているセーアン，街路で尾行し，ほんの 15 歳だった彼女のあとをつけているセーアンの」．そのイメージは明確で，鮮やかで，リアルだった．セーアンのしたことは他人を操ったに等しい．間違っている．彼女の胸は苦痛で溢れた．『主よ，許させたまえ』．それは善きクリスチャンの心の叫びだった．彼を許したとき，レギーネは「悲観の名人」キェルケゴールから初めて決定的に自由になったのだ．こうしてやっと彼女は名実ともにシュレーゲルの妻となり，解き放たれて「普通の」人生に喜び

が見出せるようになった.

評伝 *Søren Kierkegaard — Den eksisterende tenker*（1954）を書いたノルウェーの思想史家 **Finn Jor**（1929 生）は，1997 年に小説 *Kjærlighetens Gjerninger*（『愛のわざ』デンマーク語版では ***Din for evig***）を出版した．タイトルとしてどちらが相応しいのか議論のあるところだった．Jor は，キェルケゴールの『愛のわざ』(1848）に言及し，すべての身体的なものを除去して彼女との連帯感を保とうとした.「本当の愛は精神の愛，この世での欲望に勝り，感情とは全く異なる，より安定したものに深く根ざしている.【・・・】エロス的なものは消えてしまう．愛は精神的な共同体へと変わっていた」．この意味においてレギーネとキェルケゴールは一緒だったし，それはレギーネがシュレーゲルと結婚してからも変わらなかった．この永遠の結びつきは，デンマーク語版のタイトルで証明される．それはキェルケゴールが彼女への手紙を締め括る際に使ったまじないのようなその言葉を呼び起こすからだ.

Din for evig における話し手の私は，1896 年の 11～12 月の頃自らの人生を振り返って思いを巡らせるかなり老いた未亡人のレギーネ・シュレーゲルだ.「だが老年ともなると，人は説明を求めて自らの生きて来た道を掘り返し，やり直しがきかないことを知る【・・・】私は，ただただ自分の来し方については他人に頼らなければならない，それは私にはどうしても必要なことなのだ」．そういう他人を，幸いにも彼女は目の前に持っていた，それが長年にわたって信頼関係を築いてきた率直な気質のお手伝いの Susanne だった．構成としては，*Din for evig* は *Gamle Minder* と軌を一にしている．どちらの作品においても，年嵩の人間が自らの人生を若い従順な人間の前で総括して，なんとか結論としての答えに到達しようとするのだ[7].

レギーネが自らの全人生を再確認する直接のきっかけとなったのは，キェルケゴールの死から 41 年後（1896 フリッツの没年 訳注），彼女が Susanne とともにアシステンス墓地に彼キェルケゴールの墓を訪ねた日だった．その墓は彼のこの世への遺産を意味するばかりでなく，「彼と私の人生． 私たちが得られなかったがこの年月二人がそれぞれに憧れ夢みた人生」への記念碑だった.（因みに，彼女自身この 8 年後（1904．3．18 訳注）に同じ墓地のキェルケゴールの墓からほど近い場所に葬られた)．彼女がその晩年に残した最も重要な疑問は，何故二人は人生を共にすることが出来なかったのかということだ.

ところでそれは，レギーネの方からの強い愛で始まったわけではなかった．彼

[7] Johanne Luise Heiberg は自分の晩年の大作を *Et Liv genoplevet i Erindringen*（『追憶に甦る人生』）と呼んだ．このタイトルは，白鳥の歌(svanesang 絶唱，最後の作品)というあらゆる回顧録の形式を正確に示している．描かれるのは展開する人生の経緯ではなくて，再体験されるのは回顧的に理解される人生の経緯なのだ.

女は，シュレーゲルが求婚してくることを望んでいたが，それはそうならなかった．当時は「女性の場所は家庭にしかなかった．【・・・】チャンスが来たら掴まなければならない．もしフリッツが先に求婚してきていたなら，セーアンとの物語はおそらく何も出てこなかっただろう」．レギーネの父親はキェルケゴールからの求婚を受けるよう勧めた．「類は類をもって集まるというだろ．君たちは同じ環境の出だから，容易に調和を見つけられるだろう．彼はお前を必要としているし，お前も同じだ．だから良い夫婦になれる」．従順な良い子として彼女はこの善意の忠告に従ったのだ．「妻は夫を支えるもの，私はそう思う．それが生活の秩序というものだから．【・・・】こうして私は彼との結婚を承諾したのだった．今や私は彼の，彼は私のもの．そしてその日から私たちの運命は一つに結ばれた」．

そして，不思議なことが起こった．キェルケゴールを知るにつれ，彼女は次第に深く心から愛するようになった．彼は豊かな表情を持ち，知的で，人をわくわくさせる男だった．あるときは悪戯好きで皮肉っぽく，またあるときは穏やかで温かいといった風に．彼は，論争的な意見や両様にとれる応答で聞き手を挑発した．注目の中心にあることを好んだからだ．「彼は，外にあるときは見られたがり，内にあるときは聞かれたがった」．そして，まるでこれでも足らぬかとばかり，「美しくて心のこもった贈物や，ちょっとした詩集のような手紙」を雨あられのように彼女に贈って「世界一の気配り男」になろうとした．のべつまくなしに彼は喋っていた，二人で Gilleleje に遊んだときも，Østergade で買い物をしたときも，Frederiksberg Have のレストラン Josty を訪れたときや，コペンハーゲンの通りをぶらついたときもそうだった．さらに，二人は Rundetårn にも，「彼の言い方によれば」星を見る「ために」登ったが，星空に感嘆したあと，「彼はそっと私に腕を伸ばした．ついには私を抱き寄せて接吻した，最初は用心深く，それから激しく」．それ以上には進まなかった．二人とも，結婚前の性的行為は罪深いことという敬虔主義の教えを受けて育ったからだった．

だが，レギーネは日ならずして，婚約者が「二つの魂(to sjæle)，世の中へ明るく微笑みかける魂と傷つき易い暗闇に閉じ込めてきた，彼が心(hjerte)と呼ぶ魂を持っている」ことを悟った．彼は，彼女に自分の「傷つき易い暗闇」を分かってもらおうと努めた，何度も何度も彼は「重愁について，家族が負う呪い，そして自分を覆う謎めいた要求について」語った．しかし，彼女は「そのような説明をとても受け入れられなかった．何の説明にもなっていなかったからだ．たとえそうだとしても，事実は違っていただろう」．彼が彼女に自らの内奥をさらけ出さなかったために，そして彼女が自分の得た暗示的な手がかりを受け入れることが出来なかったために，二人は次第に互いから離れて行き，ついには「二つの惑星として終わった．断ちがたいほどに互いに結びつこうとしたが，私たちの間の距離

は明らかだった．私たちは，互いにこれ以上近づこうとはしなかったが，これ以上遠くへ離れて行こうとすることも出来なかったのだ」．幸せと痛みを併せ持った，「お互い無しではおられない，だが一緒になると苦しい」という自他に矛盾した愛だった．

音楽好きのレギーネが晩年に，音の世界から得たイメージをもってキェルケゴールとの関係を描写したことは特筆される．「セーアンとの日々が私の人生を決定づけた．我々が手にしたのはチェロで弾かれたメロディー音だった．それは，私がのちになって聴いたどんな音よりも深いものだった」．二人の結びつきには双方の心の中に深く響く共鳴板があったので，どちらもあとになって他の人間と同じ「メロディー音」を見つけることは出来なかったし，見つけようとも思わなかった．そしてレギーネがキェルケゴールと別れたあと数年してシュレーゲルと結婚したのは，彼女自身安心が欲しかったからでもあり，彼女の虜になっているキェルケゴールを解放したいと思ったからでもあった．そのことは，彼の著作活動における最初期の著書群で明らかになった．

Jor は，レギーネの読者を両足をしっかりと地につけ，男女の役割分担に関して「モダンな」視点を持った若い女性とすることで大成功を収める．レギーネはやや驚きながら，Susanne は「職人階級の出だけれど賢い女の子だった」と確認することになった．この階級出身の者は意見をはっきり言うものだが，Susanne はキェルケゴールについても手厳しかった．「彼は私には徹底したエゴイストのように思えます．こんなことを言うのを許してほしいのですが，誰であろうと頭の中で起こっていることを大事にするために他の事を皆押しのけてよいとは思えません．婚約している人，そしてこの世で一番好きな人を置き去りにするなんて．おそらくセーアンは二重，三重，いえ七重の意識を持っているけれど，存在というものをペンの力で一つの大きな理論にしてしまったのでしょう．人生は彼が研究した何かであり，彼が生きたものではなかった．彼の爪から逃れたあなたはただ喜べばいいのです」．しかしながら Susanne は，レギーネがキェルケゴールとの婚約なしには生きられなかったことをよく理解していた．「恋は人生に深く関わってくるものだから，不幸になることだってあるのではないでしょうか」と彼女は物思わしげながら理路整然と言い，これにレギーネが答えた．「人は不幸な恋など選ばないけど，それがやって来たら耐えていかなければならない」と．つまり彼女には分かっている，「もしその大きな愛を信じるなら，それは危険を冒して人生を賭けるようなものだ．幸せと悲劇の狭間のようなものだ」と．

晩年のレギーネは，自分がキェルケゴールの芸術家としての創造力を覚醒させた「機縁」(en foranledning)であったことをよく理解していた．彼女は，芸術が生活や幸せよりも重要という考え方に疑問符を置いたのと同様に，「神の命令とい

う考え方」にはついて行けなかった.「私は，キェルケゴールの著作群が彼や私よりも世界にとって重要なのだと自分を納得させようとした．それがせめてもの慰めなのだ．私たちはこういう人生を歩んだ．セーアンの人生は去り，私のそれは終わりに近づいている.【・・・】セーアンは自分自身ばかりか私をも犠牲にした.【・・・】彼は自分の天賦の才を微塵も疑わなかった．だが，その間ずっと私たちは彼の天才，彼の詩人の悪魔(hans digterdæmon)，あるいは人があれやこれやと呼ぶものに囚われてきた．不幸な愛は最大のものと言う者が居る．私はそれが本当かどうか分からないが，いずれにしても大きな忍耐を要するものだったことは分かっている」. もしキェルケゴールがファウストのように自らを「詩人の悪魔」に捧げていなかったら，彼らは幸せな人生を共にできていたかもしれない.「人生は可能性に溢れていると言われる．それは真実ではない．実際はこんなことがあるだけだ，出会って一緒に暮らし，― あるいは出会って別れる．あるいはまた出会うこともない．すべてのものにそれぞれの値段がある．残念なことに，勘定書はいつも後からやって来る，そのときはもう遅すぎるのだ」. 死への入り口には不満だけが残された.「私にははっきりした回答が得られそうにない，どうして彼が婚約を破棄したのか. だが，それも今となっては大したことではない. 遅すぎた，遅すぎたのだ・・・」[8]

現実のレギーネは 1856 年に，キェルケゴールの早すぎた死のために明らかにならなかった二人の間にあった「未清算点」(et uopgjort Punkt) について悔やんでいた．問題は，その(未清算)点が何だったかということについて Nielsen, Gotfredsen, O'Neill, Jor が新しい確かな情報を提供したかどうかということだ. 必ずしもそうとは言えないかもしれない．あらためて俎上に載せられたのは主として「神命」(Ordren) ということだった．一方で，四人の作家たちは，レギーネがキェルケゴールによる破婚にどのように反応したかについて，それぞれ異なる説明をした．彼らがレギーネに取らせた様々な態度には，時間の見通し(Tidsperspektivet 時間軸) がかなり重要な影響を及ぼした.

Nielsen は，日記形式を選んだことで若いときのレギーネと同時化出来た．日記が反映したのは婚約期間中の彼女の直接的な反応だった. 19 歳の幸せに満ちた少女は，哲学的に過ぎる石頭男にうんざりして肘鉄をくらわしたのだ.「さようなら!」と. **Gotfredsen** と **O'Neill** にあっては，レギーネははじめ十代の女性だが，彼らの手から離れたときは 33 歳であり，彼女の人生に広汎な影響をもたらした若き日の恋への現代女性としての考え方を描く可能性を得ることが出来た.

---

[8] この作品の冒頭レギーネはキェルケゴールの墓の前に立ったとき思った(s. 12),「すべては遅すぎた．今日は 41 年遅すぎた．遅すぎた 遅すぎたのだ・・・」. 冒頭と結末に置かれたこの語り口「遅すぎた， 遅すぎた」はこの作品の基調である失われた人生の可能性への悲しみを最も良く表している.

Gotfredsen では，レギーネは次第に自分がキェルケゴールを救い出すためにこの世に置かれているだけという考えから自由になっていけたし，O'Neill では，レギーネがほんの少女だった頃に彼女の心を弄んだキェルケゴールの皮肉っぽいやり方を赦したときに本当の解放が訪れた．Jor はその小説において，最も長い時間軸をとったが，そこでは死への入口に立つ 74 歳のレギーネが長い人生が期待通りに与えてくれた回顧の知恵をもってキェルケゴールとの関係を棚卸したのだ．Nielsen にあった直接性と自発性は失われたが，代わりに Jor の時間選択はほかの 3 人の作家には全く見られなかった決定的な問題への道を開いた．年老いたレギーネの人生は，手にし得なかったキェルケゴールとの結婚生活への弱々しい悲嘆で終わることとなったが，彼女は自問した，彼が私にではなく詩人の悪魔に身を任せたのは本当に彼の誤りだったのだろうか？ と．彼が蒼天へ向けて宙返り（saltomortalespring 死の跳躍，婚約破棄を指している 訳注）を決行したのは間違った選択だったのだろうか？ そうではなくて彼女の夫としてこの地上に留まるべきだったのだろうか？ それで二人ともにより幸せな人生を持てたのだろうか？ Jor の本が差し出した，芸術は人生に比べると全く重要なものではないのか？ という問題こそ最大の問題なのだ．これこそが伝統的なキェルケゴール文献では決してお目にかかれない視点なのである．

O'Neill と Jor がそれぞれ赦しと後悔に力点を置いたことは尤もなことと思えるが，現実のレギーネが自らの人生を振り返るやり方とは著しい対照をなしていたと言えるだろう（いずれにしろ他人の説明なのだから）．彼女は，親切にしてくれたキェルケゴールを赦したいなどとは思ってもいなかったし，彼が持っていた高い使命を大いに理解してもいた．問題は，彼女が後世に伝えたいと望んだのが彼女の本当の気持ちだったのか，それとも公式版の見解だったのかということだ．彼女は，Jor 本の中のレギーネのように，内心ではキェルケゴールが二人で持てるはずだった人生を壊してしまったことに不満を感じていたのだろうか？ 疑問は，この愛の物語に他にもある多くのことと同様に，風の中で揺らめいている．レギーネとキェルケゴールが見通せるかぎりこの先も常に我々を魅了してやまないことになるのは，実際は決定的な点を置く可能性に欠けるところがあるからだろうか？

訳者あとがき

1837 年 5 月春たけなわの Frederiksberg で二人は出会った．キェルケゴール 24 歳，レギーネ 15 歳．デンマーク文学史に忘れがたく刻まれる稀有な恋物語の幕開けだった．だが，1840 年 9 月の婚約は，早くも 1 年後キェルケゴールによって一方的に破棄された．何故？何があったのか？爾来この謎を巡って多くの言説が

飛び交うことになるが，それらはいずれもキェルケゴール側からの説明だった．

この流れを変えたのが 1901 年 1 月に Erik Søndergaard Hansen 実は Flemming Chr. Nielsen が刊行して一大センセーションを巻き起こした *Regine Olsens dagbog* だった．その後こうしたレギーネ側からの日記や物語形式の作品群が 2005 年まで次々と出版され，2013 年の Joakim Garff の *Regines gåde* を経て，2019 年の Henrik Fibæk Jensen の本書に至る．

神学・歴史学者 **Henrik Fibæk Jensen** の ***Kierkegaards saltomortalespring***（2019）は，そのサブタイトル En boggave fra Søren Kierkegaard til Regine Olsen からも知られるように，キェルケゴールが婚約中の 1840 年 11 月レギーネに『古い思い出』という本を贈ったことが二人のその後の運命を変える機縁となったと見て彼らの足跡を論評した作品である．ここに抄訳した章「**レギーネは本当のところどう考えていたのか?**」（**“Hvad tænkte egentlig Regine?”**）は，この作品中最も長い章であるだけでなく，四人の作家や研究者によるレギーネ物語 5 作品 ― 各人各様に破婚後の，そしてキェルケゴール死後のレギーネの人生の「詩と真実」が語られる ― を丁寧に読み込んで明快に紹介評釈しており興味深い．一方でやや奇妙で残念なのは 2013 年に刊行されていた現代キェルケゴール研究の第一人者 **Joakim Garff** の ***Regines gåde*** については本章でも引用は皆無で本格的に論じられてもいないことである．

この *Regines gåde* は，本訳稿で見てきたレギーネ作品群の集大成的な作品であると同時に正攻法の学術的な研究書でもある．偶然発見した St. Croix 島時代のレギーネが姉 Cornelia と交わした 100 余通の手紙を効果的に使いながら，時にその婚約時代にまで遡りつつ，レギーネを肉体と血，意見と欲望を持ったリアルな女性として描き，彼女の 1855 年以降その死までの日常を年を追って慎重に想像力を働かせ愛情深く追っている．Garff は，二人が破婚後も 1855 年の永別の日まで街なかで頻繁に無言のすれ違いを演じていたことやキェルケゴールが晩年に吐露した言葉（夫を介してレギーネに宛てた手紙や時にレギーネを vor Regine と呼んだことなど），それに対するレギーネの肯定的な沈黙を踏まえて『二人はこの世では一緒になれず辛抱強く永遠を待たなければならなかったので永久に一緒にいるのだ』と書く．だが，破婚の真因やレギーネの心奥は謎のままであり，その点では先に挙げた作品群と変わらず，Garff も Georg Brandes の *Søren Kierkegaard En kritisk Fremstilling i Grundrids*（1877）から『キェルケゴールは謎，大いなる謎だ』を引いて，そこにレギーネをも加えなければならなかった．

謎はキェルケゴールの饒舌とレギーネの寡黙の中に秘匿され，それ故にまた二人の物語はいつまでも語り継がれることになったと言えるだろう．